

裏表紙からスタート!

東京都立大学 総合研究推進機構NEWS

Miyacology



都立大の研究の今を伝える

17
号

WINTER
2024

ミヤコロジ
推しラボ vol.6

理学部 物理学科
栗田玲教授編

ミヤコロジ™



TMU



日々の活力と満足感を育む「作業の力」 意味づけされた作業療法が人生を豊かにする

健康福祉学部のボンジエ・ペイター教授の専門は、高齢者や障がい者が自分らしい生活を取り戻すための作業療法や作業科学。その基盤となる知識体系や実践上の注意点などをお聞きしました。



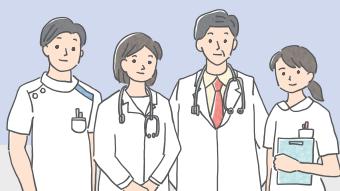
分野横断的に知見を結集させることで 作業療法は作業科学へと発展してきた

私はこれまで、研究者として作業療法に携わりながら、作業療法士としてのピアサポート実務にも従事してきました。そして、約2年前には私自身が脳卒中を患って片麻痺となつたため、作業療法を受ける当事者としての入院やリハビリテーションの経験も踏まえて、研究成果を社会に還元したいと考えています。当事者として感じたことは、多職種の医療従事者でチームが構成されるにしても、各場面、各スタッフの専門性に応じたサポートにならざるを得ないということ。患者の心身についてトータルで把握して対応する必要性を感じました。



例えば、医学の視点では血圧やコレステロール値などをピンポイントで測定しますが、ピンポイントである以上、得られる所見は限定的になります。医学の知識は大切ですが、そもそも人々の健康状態を決定する要因には、遺伝や医療、環境のほか、日常生活が挙げられます。しかも、人々の生活は人それぞれ。患者それぞれがどのような価値観で生活していくのかまで把握した上で作業療法が求められているのです。

私は障がい者へのインタビューに基づく質的研究もしていますが、医学的な視点のみならず、心理学や社会学、人類学、民俗学的な視点も不可欠。こうした幅広い学問分野の方法論や知識をベースとして体系化されてきたのが「作業科学」と呼ばれる学問分野です。



もっと詳しく

入院時の実体験をWebで公開中!

スタッフの対応ひとつで 相手の気持ちは大きく変化する

作業療法の対象が高齢者の場合は、日常生活活動をできるようにすることと同時に、日々の活力を高めることも重要です。身体機能の回復には努力も必要であり、その原動力、活力の向上が求められます。高齢者は認知機能が低下し、人生の目標や生きがいを見出せない場合もあるものの、どの程度の介助を希望し、どうすれば前向きな気持ちで生活できるのかを見極める必要があるでしょう。日本人は「他人に迷惑をかけたくない」と考えがちですが、周囲のサポートがなければ日常の行動は限定的になるため、対話の中で反応を見ながら、望ましいアプローチを進めていくべきだと考えます。

なお、私が高齢者施設で食事シーンの観察とインタビュー調査を行ったところ、食事を丁寧に口に運んでくれるスタッフに対応された高齢者は、食事を「美味しいかった」と振り返り、スタッフの対応がやや雑な印象を受けたケースでは「美味しいなかった」と話していました。高齢者を前向きにさせる必要があることを考えれば、作業療法に限らず、医療や福祉に携わる方には知っておいてほしい教訓だと考えています。



「日常生活活動」の意味合いを明確化し 個々に適した作業療法に落とし込む

作業科学は、作業療法から生まれた学問体系であり、「作業」とは、1日の中で行う「日常生活活動」を表します。作業療法におけるかつての知識基盤は、ほぼ医学に由来するものでしたが、必要なのは作業療法や作業そのものに関する知識基盤。作業科学の確立に向けては、心理学や生理学、運動科学などの知見も注ぎ込まれてきました。

その上で私が重視するのは、日常生活活動に対して、人生における意味合いを与えることです。複数の被験者が1日を振り返り、その日の代表的な作業を活動日記にまとめるという院生が開発したプログラムでは、被験者1人ひとりにとって何が意義深く満足度が高い作業であるのか、またその作業にどのような意味や特徴があるかが見えてきました。大切なのは、リハビリテーションをこなせるか否かという尺度や、こなすための効率性ばかりを重視するのではなく、リハビリテーションや日常生活活動の意味合いを明確化すること。何らかの作業ができても満足感につながらないケースもあるため、個々の価値観に合った作業療法の実践をとおして、満足感の向上を促進することが肝心なのです。



もっと詳しく

作業の意味合いに
加え、重要なポイントをWebで公開中!

改めて馴染みのある生活を目指すプロセスである作業療法やリハビリテーションでは、「できないこと」の克服に執着し過ぎることなく、「できること」を大切にするスタンスが重要です。再び楽しく生活するためのリハビリではありますが、リハビリそのものにやりがいや楽しさを感じられることが理想です。

PROFILE

健康福祉学部 作業療法学科

ボンジエ・ペイター 教授 BONTJE Peter

スウェーデン・カロリンスカ医科大学にて医学博士号取得。2012年に准教授として首都大学東京健康福祉学部に着任し、2016年より現職。専門は、身体障がい者、高齢者の作業療法、作業科学、Interprofessional Education（チーム医療の教育）。日本、オランダ、イギリスの3カ国で作業療法士資格を保有している。



言語や文化の垣根を越えた ヨーロッパ文学の系譜に迫る

『Wuthering Heights』(邦題『嵐が丘』)といえば

19世紀のイギリスを代表する文学作品。

著者のエミリー・ブロンテとその姉妹の作品に見られる相関性や

ドイツ・ロマン主義文学から受けた影響などを考察し

国境を越えた新たな汎ヨーロッパ的系譜の構築を目指す

人文社会学部人文学科の佐久間千尋助教にお話を聞きました。

読めば読むほど 新たな発見のある『嵐が丘』

私にとって、現在の研究につながる転機となったのは大学3年次の夏。語学研修でイギリスに行く機会があり、19世紀に活躍した作家姉妹であるブロンテ姉妹が住んでいた牧師館を訪れたことです。姉妹の一人、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』は翻訳版で読んだ経験はありました。卒業論文では原書で読み破り理解するまでに時間がかかったものの、ことあるごとに読み返すと新発見の連続でした。見過ごしがちな何気ない記述でも実は重要な意味があるなど、巧妙かつ周到に複雑で謎めいた世界観が描かれており、新たに気づいた切り口で読み進める。物語が新たな様相を呈するような感覚を覚えました。

また、『嵐が丘』で興味深かったのは「窓」をはじめとした空間の描写方法や、その空間を行き交う登場人物の心理描写です。大学院に進学して研究を続けるうちに、空間描写と登場人物の語りの構造が関係していることもわかり、現在進めているドイツ・ロマン主義文学との関連性や汎ヨーロッパ性の研究のベースとなっています。

! Web版でもっと詳しく解説中!

人文社会学部 人文学科 英語圏文化論教室

佐久間 千尋 助教 SAKUMA Chihiro

東京女子大学文理学部英米文学科卒業後、同大学院人間科学研究科人間文化科学専攻博士後期課程修了。博士(人間文化科学)。大東文化大学、専修大学、聖心女子大学、東京女子大学、首都大学東京などの非常勤講師を経て2018年より現職。専門は19世紀イギリス文学。





『嵐が丘』で描かれている「窓」は登場人物の心模様を代弁している

『嵐が丘』で私が着目した「窓」。建物の内側と外側の境目ですが、ドアと違って透明なため、誰かがカーテンで覆い隠して内側を守ることもあれば、建物内の閉塞感を解放するために開けることもできます。『嵐が丘』では、登場人物が何らかの行動を取った際の心象が窓の描写をとおして表現されており、空間の変容と心象の変容との運動性を解き明かすることで、人間関係における力学が垣間見えるのです。同様の特徴は、18世紀中頃から19世紀初頭にかけて流行したゴシック小説と呼ばれるジャンル、いわゆる恐怖小説にも見られ、先行研究でも屋敷や古城などの空間が、閉鎖性と解放性の象徴として使われていると指摘されています。

また、小説は1人称での語りだけではなく、誰かが話した内容について別の人物が語り手となり、伝聞形式で記述していく二重構造や、三重から四重、さらにゴシック小説では五重構造の作品もあります。『嵐が丘』は空間と心象が複雑に絡み合いながら、入れ子構造と呼ばれる語りの構造の重層性にも特徴があり、この点でもゴシック小説との共通性が見られるのです。現段階ではエミリーがゴシック小説を読んでいたことを示す確固たる根拠はありませんが、今後、ゴシック小説やドイツ・ロマン主義文学との相関性を導き出す証拠を見つけ、19世紀のイギリス文学における新たな系譜を提示していきたいと考えています。

バックグラウンドが違っても読み込むことで理解は進む

日本人の研究者が海外文学を研究する際、文化的背景に基づく感覚の違いが難しさを生むこともあります。ある研究者が自然な流れだと感じて読み飛ばしてしまう場面が、異文化環境で生まれ育った研究者からすると自然な流れではないことも珍しくありません。私自身、当初はイギリスの皮肉の文化など、行間に隠された意味までは感じ取ることができませんでした。ただ、同じ作家の作品をいくつか読んだり、同時代の作家の作品を読んだりすることで気づけることが多いほか、先行研究で指摘された内容も理解の助けとなって感覚が養われていくのです。

ブロンテ姉妹の作品とドイツ・ロマン主義との関連性について、私のような語りの構造と空間の相互作用とテクスト分析を組み合わせる研究スタイルは主流ではありませんが、効果的に作用させることで新境地の開拓につなげたいと考えています。

語学研修で訪れた
ブロンテ・パーソナージ博物館がある
イギリスのハワース



推測の域を脱し得ない文学研究に明確な根拠と新規性を提示したい

ブロンテ姉妹の作品全般に目を向けると、ロマンス的な要素や人間関係の描写などに類似点が見られ、『ワイルドフェル・ホールの住人』というアン・ブロンテの作品は、複雑な構造がエミリーの『嵐が丘』と類似しています。ただ、アンはリアリズム小説として当時の社会背景を取り入れる傾向があり、『アグネス・グレイ』という作品は、住み込みの家庭教師をしていた際の実体験に基づくもの。アンはリアリズム小説の手法を取り入れることで独自性を生み出したと考えられます。また、3姉妹のなかでもっと多くの作品を著したシャーロット・ブロンテは、リアリズムを意識した『教授』、労働者たちによるラダイト運動などの社会背景をとりいれた『シャーリー』という社会小説を書いており、『嵐が丘』の1作品しか残していないエミリーだけが特異性をもって語られることもあります。

もっとも、ブロンテ姉妹についての先行研究は豊富なのですが、推測に基づくものも少なくありません。シャーロットとエミリーがベルギーのブリュッセルに留学していた事実もあり、隣国のドイツ・ロマン主義文学の思想や概念を取り入れた可能性は考えられますが、それを断定的に論じた先行研究は見受けられません。だからこそ私は、先行研究でも確固たる証拠がなく、明瞭な指摘がされてこなかった領域の開拓に挑み、説得力をもってドイツ・ロマン主義文学の新たな汎ヨーロッパ的系譜を論じていきたいのです。

洞察力・想像力・分析力など、文学研究は汎用スキルを高めてくれる

読書の際におすすめしたいのは、先入観を持たずに読み進め、純粋に気になった点や印象に残った点を書き出していくことです。その中から特に興味を持った点を深堀りしていくことが、専門的な文学研究の出発点にもなるのです。作品には作者がさまざまな伏線を散りばめており、最初は意味や意図が不明な記述もありますが、それが積み重なってひとつの大きなテーマになることがあれば、別の記述を考察することで理解につながることもあるでしょう。

昨今はテレビドラマの考察がブームになっていますが、私が担当する非常勤先の演習授業でも学生が小説を読み、個々の見解を発表するグループワークやディスカッションを行っています。自分とは違う切り口での解釈に気づき、伏線が回収される楽しみもありますし、日常的に英語に接しますので、英語力そのものも高まります。そして、作品をとおして多様な人間模様に触れ、行間を読む洞察力や想像力が磨かれるほか、多角的な分析力も向上していく点に、文学研究の意義や醍醐味があるのです。

教育現場の「主体」は誰なのか 生徒の権利と責任を問い合わせ直す

頭髪の色や長さなどに関して、ときに根拠が不明な
「ブラック校則」がまかり通ってしまう日本の教育現場。
守られるべき子どもの権利や、権利に伴う責任について、
国内外での精力的なインタビュー調査をとおして研究を進める
人文社会学部人間社会学科の竹原幸太准教授にお話を聞きました。



18歳成年の導入は 生徒自治を見つめなおす契機に

日本では2022年4月に「18歳成年」が導入され、少年法分野では、18歳と19歳に成人と同等の責任を持たせるか否かという議論が巻き起こりました。結果的には、刑事処分は科さないものの従来の少年よりは厳しく対処する「特定少年」という枠組みが生まれました。18歳といえば高校3年生。教育分野では、いわゆる「ブラック校則」に悩む生徒が自分たちで学校生活のルールをつくる権利がクローズアップされるようになり、18歳成年に関する議論は、子どもの権利と責任が混在し、混乱している状況といえます。生徒自身がルールづくりに参加する権利行使できるという点では肯定的に論じられるのですが、ルールを違反する生徒が出た場合、誰がどのように処分を決定するのかという点では責任が伴い、生徒自治による運営の難しさがあるのです。そこで注目すべきが、米国で進められている「ジャスト・コミュニティ」と呼ばれる取り組みです。

人文社会学部 人間社会学科

竹原 幸太 准教授 TAKEHARA Kota

早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻博士課程単位取得退学後、東北公益文科大学公益学部准教授などを経て2020年より現職。専門は教育哲学、修復的正義論、矯正教育史。近著に『立ち直り・甦りの教育福祉学—少年司法の軌跡と甦育』(成文堂)がある。



生徒間の意見対立も成長の原動力となる

私が観察したのは、アメリカ・ニューヨーク郊外にあるスカースデール高校。同校のオルタナティブスクール(通称、Aスクール)では、生徒参加と討議を徹底したジャスト・コミュニティという取り組みを実践し、ルール違反をした生徒への対応方法も討議しています。その際、既存の判断基準に従って教員主導で対応を決めるのではなく、生徒が中心となって話し合い、既存のルールを見直しながら「正義」を編み直していくような「修復的正義」という観点で議論が進められます。

問題解決を生徒に委ねれば、意見の対立が起こるケースもあるため、大人が先回りして物事を進めがちなのですが、Aスクールは生徒間の対立自体も成長プロセスの通過点だとするスタンス。仮に生徒参加による合意形成や意思決定の結果が失敗に終わっても、それも教育的に意味のある経験になるという考え方です。生徒の対立をなくそうと考えることが不自然なのであり、ジャスト・コミュニティでの討議は生徒が多様な考え方を認識し、価値観を広げるチャンスだと捉えられているのです。

！ Web版でもっと詳しく解説中！

学校での教育と少年院での教育の共通原理を分析したい

世界的な動向に目を向けると、1989年に「国連子どもの権利条約」が採択され、日本は1994年に批准しました。批准後は、国内での取り組みを国連に提出し、国連から審査を受けます。日本はブラック校則の見直しや、いじめ・不登校に対するサポート、児童虐待への対応など、子どもの権利保障が進んでいないとの指摘を受けました。実際、批准までのタイムラグの背景には、子どもに権利を委ねると、子どものわがままを許す甘やかしになるという学校教育現場の危惧がありました。生徒は学校と契約しているのであり、その学校のルールに従うべき。学校は教員が主体であり、生徒は客体だとするロジックです。

また、一般的に学校教育では学力向上が重視されがちですが、教育の力として問われているのは、教員の期待値から外れた生徒をいかにサポートするのかということ。しかし、教育期待値から外れた生徒は、対応すべき範疇から外れた生徒と捉える意識が強いようにも思います。国内では文部科学省が学校教育を管轄するほかにも、厚生労働省は児童養護施設などの教育を管轄し、法務省は少年院での矯正教育を管轄していますが、一人の人間の社会化を図る教育的な作用に管轄官庁は関係ありません。ですので、矯正教育などには、教員の期待値から外れた生徒への指導に有用な共通原理や、校則違反などのトラブルの解決に役立つノウハウが潜んでいると思えるのです。

形式的な生徒参加ではなく参加している実感が重要

生徒自身がルールづくりを進める際に大切なのは、自分たちが合意形成や意思決定に参加しているという実感を高めることです。例えば、最終的には多数決で物事を決めるにしても、投票の後に少数派の意見を聞く時間を設け、多数派に熟慮させた上で再度投票を行うことで、少数派の参加実感を高めることも可能です。また、時間的制約があるからといって採決を急ぐのではなく、保留して熟成させてから議論を深めることも大切。いずれもAスクールで実践されている取り組みです。

しかし日本では、最初から答えが決まっている中で、形式的に生徒を参加させる操り参加やお飾り参加が多いとの指摘もあります。意見を聞くには聞いた上で、変化を恐れ変わろうとしない学校側の態度は、傾聴ではなく聞き流しとなり、生徒のあきらめ感を高めるばかり。必要なのは、生徒参加による小さな成功体験を積み重ねていける環境です。

！ Web版でもっと詳しく解説中！

生徒参加の促進は教員をも変えていく

最後に紹介するのは国内での先進事例です。山形県の遊佐町では、地域の中高生が「少年議員」となって活動する取り組みが進められ、中高生へのアンケート結果を踏まえた政策提言などを行っています。例えば、自転車通学の比率が高い地域に街灯が少なく危険だからと街灯の増設を実現させた実績もあります。少年議員となった中高生は、学校では経験できないことを地域コミュニティで経験しながら、自らの社会参加が何かしらの影響力を持てるという意識を高めています。

一方、学校教育の現場では、教員が疲弊していく現実があり、教員の待遇を改善する働き方改革の必要性が叫ばれています。ただし、Aスクールでは、ジャスト・コミュニティによって、生徒の変容を実現させたとともに、教員の変容も見られたとのこと。生徒による意思決定が教員の想定を超えて、教員が教育観や指導方法を見直して更新する契機となっており、日本国内での実践に向けてさまざまな示唆を与えてくれるのであります。



観察したスカースデール高校前で

マンガは裏表紙からスタートしています



もっと詳しく
トヨタセレクション

さらに詳しい
情報が掲載
されている
インタビュー
記事をWebで
公開しています!



学生に期待したいのは、日頃か

この分野を目指す方への メッセージ

学生に期待したいのは、曰頃から「不思議だな」「解説してみたいな」といった意識・意欲を持つこと。ただ、検索をすれば何らかの情報は出てきますが、間違った情報も少なくありませんので、それでわかつたつもりになってはいけません。さらには、多くの論文を読むことで自分が理解できたつもりになることも危険です。かといって物事を疑い過ぎて真実すら受け入れられなくなることもあります。大切なのは、バランス感覚を持って研究に臨むことです

Miyacology 17

Winter 2024

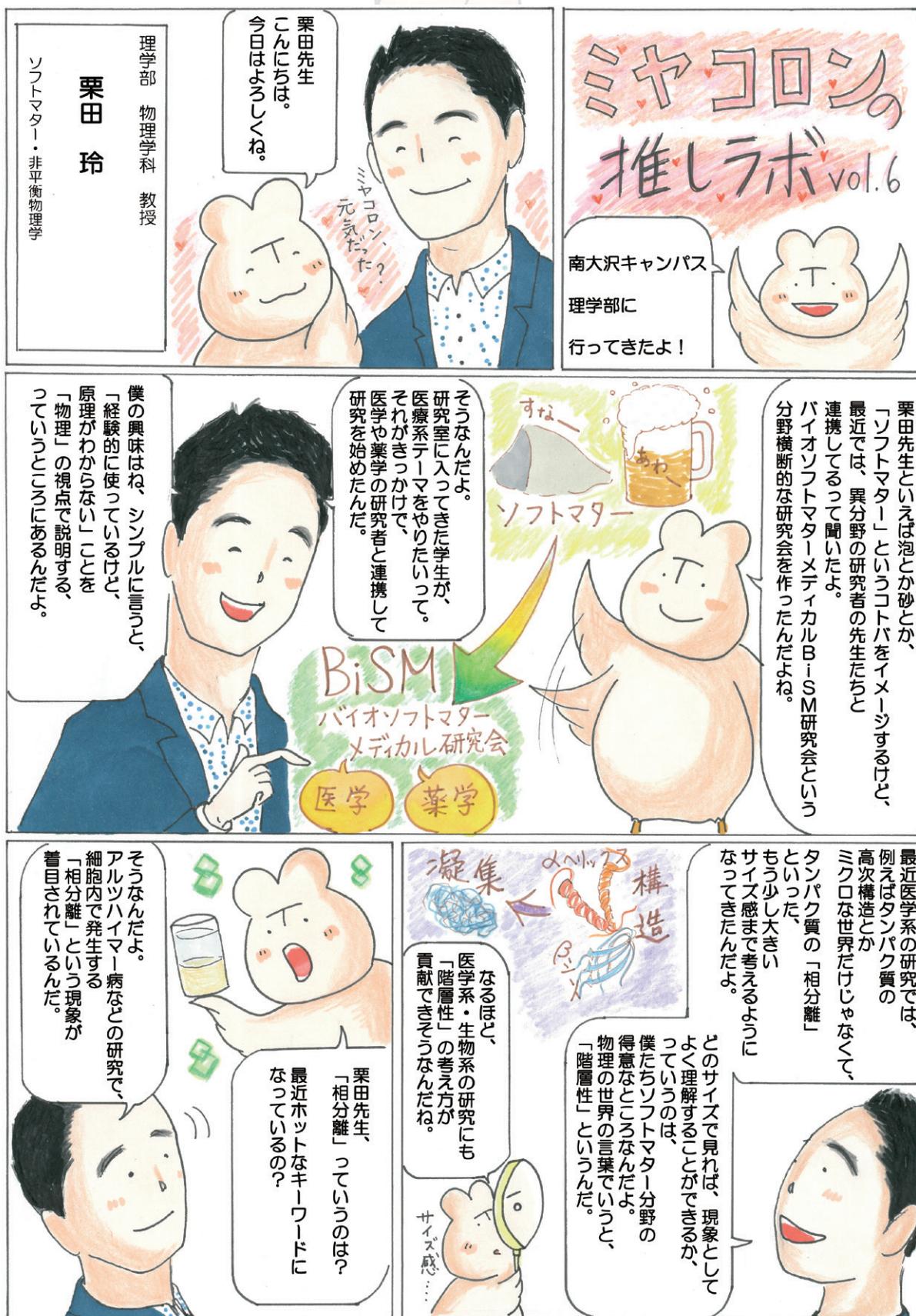
INDEX

Close-Up | TMU Research

言語や文化の垣根を越えたヨーロッパ文学の系譜に迫る
人文社会学部 人文学科 英語圏文化論教室 助教 佐久間 千尋教育現場の「主体」は誰なのか
生徒の権利と責任を問い合わせ直す

人文社会学部 人間社会学科 准教授 竹原 幸太

Pick-up | Focal Point

日々の活力と満足感を育む「作業の力」
意味づけされた作業療法が人生を豊かにする
健康福祉学部 作業療法学科 教授 ポンジェ・ヘイター

総合研究推進機構からのご案内

X (旧Twitter) では、各学科の教員が取り組む研究に関する情報や、「牧野標本館」の所蔵標本を紹介しています。ぜひご覧ください。



東京都立大学 総合研究推進機構 NEWS Miyacology [首都学(ミヤコロジー)]

第17号 2024年 Winter 2024年2月1日発行 企画・制作・発行:東京都立大学 総合研究推進機構



© 2020 TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1

東京都立大学 南大沢キャンパス内 プロジェクト研究棟2階

TEL 042-677-2728 / FAX 042-677-5640

mail ragroup@jmj.tmu.ac.jp <https://research-miyacology.tmu.ac.jp>